

4 新たな不登校を生まない 未然防止の取組

学校や地域の実情に応じた取組の工夫

岩見沢市立東光中学校

岩見沢市立東小学校、岩見沢市立岩見沢小学校

効果的な取組とするためのポイント

中学校入学前に抱えている不安を取り除くために、中学校生活の何に不安を抱えているのかを理解したり、期待がもてる環境づくりを行ったりするとともに、中学校教員が情報モラル授業を小学校で行ったり、未就学児童及び小学校低学年の保護者を対象に講話を行ったりしている。

取組の実例

1 「秋の1日体験入学」の実施と学校説明会での「体験授業」

9月に秋の体験入学を開催しており、校舎見学や授業見学、入学準備と心構えの講話、体験入部の他に、加配教員と小学校教員が連携して、2校の小学生が入学後の人間関係構築のきっかけを掴むためのグループエンカウンターを行っている。

小学生が不安に思うことの多くは、「新しい仲間ができるか」、「上下関係はどうなのか」、「教科担任の授業についていけるか」であることから、今年度は、「名刺交換ハイタッチゲーム」、「東光中学校の先生クイズ」、「同じ星座でグループを作ろう」を取り入れ、和やかな雰囲気の中、自分らしさを表現できるように配慮するとともに、「学年合唱披露」により、中学校で成長した先輩の姿を紹介することを通して、小学生が先輩に対してあこがれをもち、中学校生活へ期待をふくらませることができるようにする。

さらに、9月に構築した人間関係を春につなげるために、2月の学校説明会において、構成的グループエンカウンターの2回目を行ったり、小学生が中学校の授業を実際に受ける体験授業を実施したりすることにより、中学校生活によりよく適応することができるガイダンス機能の充実を図っている。

2 情報モラルの乗り入れ授業と保護者への情報モラルの講話

小学校参観日の公開授業として、中学校教員が特別活動の乗り入れ授業を行うとともに、保護者懇談会に参加し、保護者対象に情報モラルについて講話を行う。

3 校区の取組を地域に発信

民生委員と児童委員を対象に、加配教員による「情報モラル」、「スマホ・ゲームが脳に与える影響」をテーマに講演を行い、本事業で取り組んでいることについて地域に発信している。

秋の1日体験 6年生の感想

◇今まで中学校に不安を持っていたけれど、思ったよりも先生方も中学生も楽しそうに授業をしていたので今までの不安は全てなくなりました。

◇中学校は勉強ばかりかと不安な気持ちでいました。でも見学させてもらったとき、授業の様子が賑やかだったので不安がなくなりました。みんなの休み時間のときの賑やかさは中学校とは思えないくらいで、みんなが生活を楽しんでいる様に見えました。中学生になりたいというか、安心感が広がりました。

【秋の1日体験での子どもたちの感想】

情報モラル乗り入れ授業 5、6年生の感想

◇危険なことがわかったので欲しくなくなりました。私の親が買ってくれないのは、親が子どもの身を守るためだという理由があることがわかりました。

◇もしトラブルに遭ったら冷静になれなくて不安になると思うけど、困ったときは、家族や先生など身近な大人に相談したりした方が、不安がなくなると思うからきちんと相談しようと思いました。トラブルに遭わないように、正しい知識と技術を身につけたいです。夜遅くまで起きていると、体や生活に悪い影響が出ることがわかりました。

【情報モラル乗り入れ授業での子どもたちの感想】

成果(○)と課題(●)

- 秋の1日体験入学を実施したことにより、児童に対して中学校を身近に感じさせたり、中学校生活への不安を軽減させたりすることができた。
- 小学校段階における情報モラル教育が重要になってくることから、家庭での学習時間やゲームや携帯情報端末等の利用について家庭との連携を図ることができるよう、小・中学校の教職員を対象とした研修の充実を図る必要がある。

4 新たな不登校を生まない 未然防止の取組

小・中学校と家庭、地域が連携・協力した取組の工夫

石狩市立樽川中学校、石狩市立南線小学校

効果的な取組とするためのポイント

不登校の未然防止に向け、全ての児童生徒が自己存在感や充実感を感じられる「居場所づくり」が大切である。そのため、小・中学生と一緒に活動する機会を設けるとともに、日頃から家庭や地域と連携し、児童生徒が活動する基盤を整備する。

取組の実際

1 児童生徒の「居場所づくり」につながる小・中学校合同清掃の実施

児童生徒を町内会単位のグループに分け、校区内の清掃を実施した。中学生が、グループの小学生に温かい声をかけ、リーダーシップを発揮しながら小学生をまとめ、熱心に活動する姿に対し、小学生があこがれをもっている様子が見られるなど、様々な関わりを通して、児童生徒が自己存在感や充実感を感じられる「居場所づくり」を進めている。



【小学生に説明する中学生】

また、町内会などの地域住民にも参加していただき、地域住民との触れ合いを深めながら活動した。地域住民から、声をかけていただくことも、児童生徒の「居場所づくり」につながっており、未然防止に向けた取組を進めることができた。

2 家庭と連携し、情報モラルを身に付けさせる取組

非行防止教室や新入生の入学説明会など、様々な機会を通して、児童生徒や保護者を対象とし、警察の方を講師に、情報モラルに関わる講話集会を開催した。携帯電話やスマートフォンの使い方や実際に起きたトラブル等を具体的に例示し、社会生活上のルールやマナーを身に付けさせる取組を進めることができた。

3 家庭・地域が一体となったPTA活動の取組

(1) 登下校時における交通安全指導やお祭りの巡視

家庭・地域が、児童生徒を取り巻く様々な現状や課題等の理解を深め、交流することができる機会を設定するため、通学路の交通安全指導や地域で開催されるお祭りの巡視を学校が家庭・地域に呼び掛け、協働して取り組むようにした。取組後は、家庭・地域からの気になる情報は、学校に情報提供してもらい、学校内で情報を共有するとともに、指導の改善に努めた。

(2) 生振小学校PTAを交えてのPTA3校交流会の開催

PTA役員と中1ギャップ検討委員会の中心スタッフが一堂に会し、地域の実態や児童生徒の様子について交流し、連携を深めている。

成果(○)と課題(●)

- 小・中学生がそれぞれの役割をもち、交流し、児童生徒の「居場所づくり」を進めるとともに、日頃から家庭・地域と連携し、児童生徒が活動する基盤を整備することができた。
- 不登校の未然防止の取組を充実するため、各種調査結果に基づいた取組や検証を進める必要がある。

4 新たな不登校を生まない 未然防止の取組

小・中学校と家庭、地域が連携・協力した取組の工夫

小樽市立朝里中学校

小樽市立朝里小学校、小樽市立豊倉小学校

効果的な取組とするためのポイント

小学校から中学校へ円滑に接続し、義務教育9年間を見通した教育活動ができるよう、制度を整備し、環境の変化に対応できる生徒の育成を目指すとともに、校内支援体制の整備を図る。

取組の実際

1 小学校から中学校へ円滑な接続のために

小学校から中学校への大きな環境の変化に不安を感じる児童は少なからずいる。児童生徒を義務教育9年間のサイクルで指導するという考えのもと、小・中学校間の情報交流や指導の共通化に努める小中連携教育を推進している。小学校時代に不登校傾向にあった児童の情報は詳細に中学校へ引き継がれ、適切な受入れのための準備や対策がなされた。入学後の状況も小学校と情報交換するなど、小中が互いに連携を図った取組を展開している。

2 受け入れの準備と環境の変化に適応できる生徒の育成のために

教員加配を活用し、学級編成を本来の3学級から4学級編成としたことで、一人一人の生徒が抱えている実態がより捉えやすくなった。客観的な生徒理解の必要性から、「ほっと」と「ほっとプラス」を数回実施した。「北海道教育カウンセリングICT活用事業」のスーパーバイザーの富家教授の助言をもとに、望ましい人間関係の構築と、好ましい生活習慣の定着、学習指導や生徒会活動、学校行事等のあらゆる場面まで個に応じたきめ細かな指導を実施し、学校や環境の変化に適応できる予防的な不登校対策を行った。その結果、今年度新入生で心配されていた不登校傾向があった生徒も不安なく学校に登校し、元気に生活をしており、1月現在、第1学年の不登校生徒は0人である。

3 校内支援体制の整備

生徒が不登校になる要因や背景は複雑化・多様化している。生徒を多面的に捉えるため、情報交流や授業交流の場면을定期的に設定し、不登校を未然に防ぐための支援体制を整備している。このことで、生徒の不登校の兆候を早期に発見することができ、複数の教職員による早期対応やスクールカウンセラー等の関係機関とも連携を図った対策をとることができた。また、長期休業中には、小・中学校の教職員による合同研修会やスクールカウンセラーによる研修会を開催し、不登校を未然に防ぐための効果的な指導やカウンセリングの手法を研修するなど計画的な取組を展開した。

成果(○)と課題(●)

- 中1ギャップ問題未然防止に向けた取組を、組織的・計画的に行ったことにより、本年度の第1学年において、不登校生徒・不登校傾向の生徒を0人とすることができた。
- 第1学年の不登校及び不登校傾向の生徒が0人であること、「ほっと」の結果が、「礼儀、表明」、「忠告、自律」で数値が高いことなどの具体的要因について検証し、全道に発信する必要がある。

4 新たな不登校を生まない 未然防止の取組

小・中学校と家庭、地域が連携・協
力した取組の工夫

共和町立共和中学校、共和町立東陽小学校
共和町立北辰小学校、共和町立西陵小学校

効果的な取組とするためのポイント

児童生徒が、地域の高校生や大人から認められることを通して、児童の自尊感情や自己有用感を高めていくことを目的に、青少年育成協会が実施する各小学校第6学年児童による防災無線を活用した朝の呼び掛け・声掛け運動を食育推進委員会の「早寝早起き朝ご飯運動」と併せて実施した。このほか異校種交流・ボランティア活動など地域と連携した取組を行った。

取組の実際

1 朝の呼び掛け・声掛け運動の実施

児童が地域住民から認められる機会を増やし、自尊感情や自己有用感を高めることを目的に、町青少年育成協会や町食育推進委員会が主催して、防災無線による朝の呼び掛け・声掛け運動を実施している。小学校第6学年の児童が朝の定時放送で交通安全を呼び掛けたり、毎月の食育の日には「早寝早起き朝ご飯運動」の呼び掛け・声掛けを行ったりしている。

防災無線は町内全戸に設置されていることから、多くの地域住民が耳にすることとなり、「上手だったよ」、「呼び掛けをありがとう」などとたくさんの大人から励ましを得ることができ、児童は達成感や充実感を感じることができている場となっている。

また、地域住民と触れ合う機会を増やし、児童生徒に自分が見守られているという安心感をもたせることを目的に、町食育推進委員会では「ふるさと給食」の際に各学校を訪問し、給食の時間を一緒に過ごすなど地域一体となった取組を推進している。

2 異校種交流・ボランティア活動

児童生徒に人の役に立っていることを実感させることを目的に、北海道共和高等学校の生徒が毎年実施している海外ボランティア研修に係る「千羽鶴プロジェクト」に町内小・中学校の児童生徒を参加させている。

高校生と共に千羽鶴を作成したり、現地の小学生に高校生が千羽鶴を贈呈したときの様子の報告を受け、交流したりするなど全町的な取組として定着している。このような取組で、児童生徒に豊かな体験活動を確保するとともに、達成感や充実感の醸成の場となっている。



3 その他の活動

青少年育成協会は各学校教員・PTAの協力・連携により祭典補導を行っているほか、年2回「補導だより」を発行しており、生活規律の共通・一貫・定着に一翼を担っている。

成果(○)と課題(●)

- 「朝の呼び掛け・声掛け」、「早寝早起き朝ご飯運動」、北海道共和高等学校海外ボランティア研修など各団体による各種事業で、児童生徒に達成感や充実感を感じさせることができるとともに、地域と連携した取組を推進することができた。
- 北海道共和高等学校の閉校に伴い海外ボランティア研修が終了となるため、今後、新たに全町的に取り組む活動の検討や加配教員が中心となった事業の検討が必要である。

4 新たな不登校を生まない未然防止の取組

調査結果に基づいた組織的な取組の工夫

室蘭市立桜蘭中学校、室蘭市立知利別小学校
室蘭市立旭ヶ丘小学校、室蘭市立八丁平小学校

効果的な取組とするためのポイント

本校では、平成29年度から、「Q-U」を導入し、各学期において不満足群や非承認群に位置する生徒を確認するとともに、学年内で生徒一人一人に応じた指導の手立てを検討し、学級担任と校内支援コーディネーターが連携して、不登校の未然防止の取組を行っている。

取組の実際

1 「Q-U」の活用

「Q-U」を活用し、客観的な視点から学級内における生徒一人一人の状況を学級担任が把握している。これまで生徒の学級内での状況の把握については、学級担任の観察によるものが大きかったが、学級担任の観察とは異なる新たな視点から、生徒の状況を把握するとともに、非承認群や不満足群に位置する生徒の状況を見取り、具体的な手立てを計画する際に生かすことができるようになった。

- 「Q-U」の学期ごとの実施
- 生徒一人一人の分析結果を基に指導方針や方策の立案

2 生徒指導交流会及び「Q-U」を活用した学年研修会の実施

全教職員が参加し、生徒一人一人の顔写真をスクリーンに投影しながら、各生徒の生活状況や課題等を全教職員で把握し、指導に役立てている。その後、「Q-U」のプロット図を用いながら、学年ごとに個に応じた指導方法を検討し、課題解決に向けた具体的な取組を確認した。

- 学期ごとに生徒指導交流会を実施
- 「Q-U」による生徒の実態把握と、改善に向けた具体策を各学年で協議

3 校内支援コーディネーターの配置と分掌組織の見直し

これまででは、不登校傾向の生徒に対し、学級担任のみの対応によるものが大きかった。

平成29年度から、「校内支援コーディネーター」を設置して、不登校のメカニズムに関する研修を行うとともに、コーディネーターが中心となって関係機関と連携を図り、外部から支援を得ることができる「仕組み」づくりを進めている。

【外部関係機関】

- ・ 室蘭市適応指導教室
- ・ 児童相談所
- ・ 三恵病院（壮瞥町）
- ・ 室蘭市教育委員会指導班
- ・ 室蘭警察署生活安全課
- ・ 山の上子どもクリニック など

成果(○)と課題(●)

- 学級担任が、不登校の問題を一人で抱え込まない環境を構築するとともに、教職員が、客観的な視点から、集団を捉えることの重要性について理解を深めることができた。
- 教職経験が短い学級担任が、不登校の問題の解決に向けた具体方策を考えることができないことから、教職員個々の不登校の問題に対する対応能力を高める必要がある。

Q-U 学級支援シート 記入例 ○△ 中学校 1年 2組
児童生徒数 (29) 人
男・女 (16・13) 人

Research 学級集団の調査・アセスメント (5月20日 実施)

1. 現在の学級集団のプロット図 (5月20日 実施)

学級満足度尺度の4群の分布状況

満足群	(18) 人 (45%)
非承認群	(10) 人 (28%)
待客行為認知群	(2) 人 (7%)
不満足群	(4) 人 (14%)

学級生活満足度尺度の領域の分布

低い領域 → (友人・友達・友達・教師)
低い領域 → (友人・友達・友達・教師)

2. 個別支援が必要な児童生徒の問題と考えられる点

A	E 氏	気の合う友達がないと一人でいることが多く、不登校傾向。
B	D 氏	落ち着きがなく、人を傷つける言動が見られ、注意されることが多い。
C	H 氏	帰宅や授業でよく眠っているで承認感をもっと高くとられた。
D	C 氏	毎て文字を書きることがあり、よく不満をもち、癪りを書き込む。
E	F 君	ふだんは無気力なことが多い。目標と一緒に進んでいって来れなかった。

3. これまでの取組 これまで力を入れてきた取組を3つあげましょう。あなたから見てその取組の効果について、次の1~5のうち一つを選んでください。
(5 十分できた 4 だいたいできた 3 わからぬ 2 あまりできなかった 1 半分だった)

タイムが帰ったら着席し、授業中は静かにする習慣の習慣化を行う。	5 (○) 3 (○) 2 (○) 1 (○)
人を傷つけるような言動はしない習慣づくり。	5 (○) 4 (○) 2 (○) 1 (○)
誰かの失敗の気持ちを大切にしようという習慣づくり。	5 (○) 4 (○) 2 (○) 1 (○)

Vision これからの取組の方針

1. 目指したい学級集団のプロット図

2. 目指したい学級集団: 次の図で表した学級集団は、どのような集団ですか?

- 人を傷つける言動がない学級集団
- 学習に対して意気込みを持って主体的に取り組むことができる学級
- 個人が互いに助け合える絆と信頼の関係を築ける学級

3. 実際のバランス: 次回実施時までに次の2点についてどのようなバランスをもって取り組めますか。

ルールづくり

学級支援シートの活用

4 新たな不登校を生まない 未然防止の取組

小中連携推進委員会及び地域ボランティア等を活用した取組の工夫

伊達市立伊達小学校

効果的な取組とするためのポイント

既存の「中学校区小中連携推進委員会」の組織に基づき、「中1ギャップ検討委員会」を設置し、中学校区の児童生徒の学力や学習状況、生活習慣の実態、特別支援教育の情報交流を行うとともに、課題に基づく共通した取組を通じて、中1ギャップの解消に資する取組を現在までの取組内容と併せて実施した。

取組の実際

1 既存の組織「伊達中学校区小中連携推進委員会」を生かした取組

(1) 学力向上

- ・ 全国学力・学習状況調査の分析結果の交流
- ・ 9年間を見通したノート指導や板書指導、「家庭学習の手引」の作成
- ・ 9年間の学習規律の見直し
- ・ 授業参観の実施
- ・ 授業後における授業研究の実施

(2) 生徒指導

- ・ 生活のきまりについての交流
- ・ 児童生徒の実態交流
- ・ 生徒指導に関わる連携（引継ぎのための資料）
- ・ 生活リズムチェックシート、「ほっと」の実施

(3) 特別支援教育

- ・ 児童生徒の実態交流
- ・ 就学指導についての情報共有
- ・ 通常学級における困りを抱える児童生徒の情報交流



「小中連携推進委員会」の様子

2 学校や地域の方々と児童生徒とのつながり

(1) 地域ボランティアとの連携・協力

- ・ 地域の各種ボランティアを教育活動に活用（ふるさとボランティア、図書ボランティア、美術ギャラリーボランティア、環境支援ボランティア、鼓笛ボランティアなど）

(2) 伊達地区学校ネットワーク会議

- ・ 年1回、市内小・中・高等学校のPTA及び教職員における実践交流

成果（○）と課題（●）

- 既存の組織に基づき、検討委員会を実施することにより、各小・中学校の教員間において、より一層、情報の共有が図られ、課題解決に向けた具体的な取組につながっている。
- 次年度に向け、検討委員会としての共通課題の焦点化を図るとともに、各小・中学校における周知や取組状況に差が見られることから、各小・中学校が足並みを揃えて、共通した取組を行う必要がある。

4 新たな不登校を生まない未然防止の取組

生活のリズムや家庭での過ごし方(家庭での学習時間や、ゲーム、スマホ等の利用を含む)等に関する家庭との連携の充実

長万部町立長万部中学校
長万部町立長万部小学校、長万部町立静狩小学校

効果的な取組とするためのポイント

- 小・中学校が共通で、家庭に向けて学習習慣の定着や望ましい生活習慣の確立について指導や働きかけを行うとともに、小・中学校に応じた取組が全家庭に浸透するよう、「中1ギャップ未然防止連絡協議会」において内容の工夫・改善を図った。

取組の実際

1 「家庭学習強調週間、携帯・スマホ・ゲーム利用時間制限週間」の取組

長万部町では、家庭学習習慣の定着と望ましい生活習慣の確立をねらいとして、町内の小中高が連携して「家庭学習強調週間、携帯・スマホ・ゲーム利用時間制限週間」の取組を年3回一斉に実施している。

新学期が始まる4月の下旬、中学校の定期テスト前の8月下旬と2月中旬に全ての学校で保護者へ啓発するチラシを配布し、家庭学習時間の確保や夜8時以降は携帯等を保護者に預け、電子メディアに触れない時間を設けることなどを働きかけている。

小・中学校ではこの期間に「生活リズムチェックシート」を活用して、家庭と取組の様子などを情報交流し、取組がより効果的になるように工夫している。

【長万部小学校保護者アンケートの結果（H28、H29前期（9月実施））】

家庭学習強調週間は効果的であった	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
平成28年度前期	37%	43%	18%	2%
	80%		20%	
平成29年度前期	33%	54%	12%	1%
	87%		13%	

2 中学校「一日体験入学」の実施

例年、3月に午後日程で行っていた第6学年の児童の「中学校一日体験入学」を、より中学校生活に近い日程とするため、今年度から1日日程で実施することとした。

昨年までの体験授業、部活動見学に加え、長万部中学校の特徴の1つである全校生徒が食堂に集まって全校給食を経験する。

給食の準備・片付けの際には中学生がサポートすることにより、上級生との関係構築のきっかけとなり、中学校入学後もよりよい先輩・後輩の関係となることが期待される。

成果(○)と課題(●)

- 小・中学校が共通の視点で取り組んでいるので、児童生徒に対する家庭内での声かけや家庭学習習慣の定着など一貫した指導を行うことができた。
- 「携帯・スマホ・ゲーム使用制限」の取組は、各家庭の使用に関する方針やルールが異なるので、本取組の趣旨を丁寧に説明するなど家庭に対する働きかけを工夫する必要がある。



4 新たな不登校を生まない未然防止の取組

新たな不登校を生まないための魅力ある学校づくりの取組

東川町立東川中学校、東川町立東川小学校、東川町立東川第一小学校、東川町立東川第二小学校、東川町立東川第三小学校

効果的な取組とするためのポイント

子ども理解支援ツール「ほっと」や「いじめアンケート」など、客観的な資料から児童生徒を多角的に理解するとともに、日常的に情報交換の場を設定したり、複数の教職員やスクールカウンセラーが意見を出し合い、役割分担や取組の検証を行ったりする必要がある。

取組の実際

1 「ほっと」等、各種調査の分析結果を活用した教育相談の実施

- ・小・中学校で子ども理解支援ツール「ほっと」や「いじめアンケート」など、客観的な資料を活用することで、児童生徒を多角的に理解することができ、自校での教育相談や教育活動において、児童生徒に寄り添ったきめ細かな指導を充実させることができた。また、日常的な情報交換を大切にするとともに、生徒指導事例研修会等で複数の教職員やスクールカウンセラーが意見を出し合い、役割分担や取組の検証を行っている。

2 人間関係づくり能力の育成を図る児童会・生徒会の取組

- ・新たな不登校を生まないためには、児童生徒一人一人が、「かけがえのない存在として大切にされている」、「認めてもらえている」という思いを抱くことができる集団をつくる必要がある。そのため、子ども理解支援ツール「ほっと」等を活用して集団の状態を客観的に捉え、教職員で共通理解を図るとともに、児童生徒が主体となり、よりよい人間関係を構築するための具体的な取組を児童会・生徒会活動に意図的・計画的に取り入れた。
- ・【町内小・中学校共通】「あいさつ運動」～児童会・生徒会役員が玄関に立ち声かけを行う活動
- ・【東川小学校】「東小カーニバル」～高学年が低学年を招待して一緒に活動を行う異学年交流
- ・【東川第一小学校】「がんばり集め」、「やさしさ集め」～がんばりや優しさを見付け認め合う活動
- ・【東川第二小学校】「ふわふわ集会」～ふわふわ言葉を使って過ごせるようにするための活動
- ・【東川第三小学校】「ありがとうの木」～がんばりを認める言葉を葉の形の用紙に書き、ありがとうの木に掲示する活動
- ・【東川中学校】「思いやり集会」～思いやりをもって学校生活を送る決意をカードに記入する活動
- ・【児童生徒による小中の交流活動】～小学校児童会が、中学校に学芸会のポスターを提示したり、中学生が出身小学校の運動会や学芸会・学習発表会の運営やステージ出演に参加したりする活動

成果(○)と課題(●)

- 子ども理解支援ツール「ほっと」など、客観的な資料を活用したことで、児童生徒の困っている状況等を把握することができた。また、児童生徒が学校生活全般で成功体験や達成感を得ることができるよう、必要な配慮を学校全体で情報共有したことで、適切な支援を行うことができた。
- 人間関係や学習の遅れ、学校生活に対する不安等により、不登校に至る個々の状況が多様化している。支援方法の専門性が求められるケースが増加しており、支援の在り方を関係機関と連携して進めていく必要がある。

4 新たな不登校を生まない 未然防止の取組

不登校の傾向が見られ始めた児童生徒への早期の対応の充実

天塩町立天塩中学校
天塩町立天塩小学校、天塩町立啓徳小学校

効果的な取組とするためのポイント

不登校の傾向が見られた様々な課題を抱える児童生徒に対して早期に対応するために、スクールカウンセラー等との関係機関と連携したサポート会議を開催し、きめ細かく丁寧に対応している。

取組の実際

児童生徒理解の充実と関係機関と連携したサポート体制の強化

不登校の傾向が見られた児童生徒に対して、迅速かつ適切に対応するには、生徒指導部を中心とした学校全体での指導体制を整備し、不登校の問題に対する「未然防止」「初期対応」を組織的・計画的に進めることが大切である。本地域の中学校では、「不登校早期発見チェックリスト」を活用するとともに、不登校傾向の生徒一人一人に対し、指導記録（個人カルテ）を作成している。また、定期的にサポート会議を開催し、当該生徒の状況や指導内容等を確認し、今後の指導方針等を協議している。

このサポート会議は加配教員が推進役となり、スクールカウンセラーや保健師も同席している。

不登校早期発見チェックリスト			
学年・性別 氏名		年 () 月 日	記入日 平成 年 月 日
氏名		記入者	
関わり	チェック項目		
時間	<input type="checkbox"/> 欠席が長引いたり、繰り返したりする。 <input type="checkbox"/> 遅刻や早退が急に増える。 <input type="checkbox"/> 休み明けや特定の教科のある日に欠席が多い。 <input type="checkbox"/> ぎりぎりの時間に登校し、放課後にすぐに帰る。 <input type="checkbox"/> 特別教室の移動の際に、時間がかかる。 <input type="checkbox"/> 小学校の時に、欠席が連続していたことがあった。		
人間関係	<input type="checkbox"/> 嘘をついたり、ごまかしたりすることがある。 <input type="checkbox"/> 教師や友達との視線を避けたがるようになる。 <input type="checkbox"/> 休み時間に一人でぼんやりしていることが多くなる。 <input type="checkbox"/> 友達に「学校がつまらない」などと言うようになる。 <input type="checkbox"/> ちょっとしたことと友達とトラブルになる。 <input type="checkbox"/> いつもおどおどした感じが見られる。		
学習関係	<input type="checkbox"/> 成績の急激な低下等、学習に消極的になる。 <input type="checkbox"/> 忘れ物が多くなる。 <input type="checkbox"/> 課題や提出物が滞ることがある。 <input type="checkbox"/> 入学前（幼児期を含む）に学習面で不安が見られた。		
身体	<input type="checkbox"/> 授業中に保健室やトイレに行くことが多くなる。 <input type="checkbox"/> 生活態度が無気力になる。 <input type="checkbox"/> 爪かみや指しゃぶりなど、チェック的な動きが見られる。		
家庭	<input type="checkbox"/> ゲームやインターネットを多く利用している。 <input type="checkbox"/> 夜遅くまで起きていることがある。 <input type="checkbox"/> 保護者から登校にかかわる相談が寄せられた。		
備考			

不登校生徒の指導個人カルテ（案）						
学年・性別 氏名	3年 (男) 女	家庭環境等	本人含め5人家族			
氏名	天塩太郎	父・母・姉(天塩2年)・弟(天塩5年)				
出欠の 状況	学年	出席日数	欠席日数等			
	1年	195	病欠5(風邪)、事欠1(旅行)、遅刻2、早退1			
	2年	100	病欠100(風邪5、体調不良95)、遅刻100、早退20			
3年						
これまでの 指導・取 組	○ 2年生の2学期から、体の不調を訴え、欠席が多くなる。市内立病院で「起立性調節障害」の診断を受ける(H27.9)。 ○ 欠席した日は、家庭訪問や電話連絡等により、当該生徒と常に連絡を取っている。					
今後の 指導の 方針	○ 欠席した日は、家庭訪問や電話連絡等により、当該生徒と連絡を取り合うことを継続し、担任から保健室登校を促すなど、登校刺激を与える。 ○ 土日のいずれかは、当該生徒と仲の良い生徒(啓徳 次郎)と共に、担任が副担任が家庭訪問するなどして、登校刺激を与える。					
<指導経過>						
月	出席日数	欠席日数	出席	欠席	主な指導内容・当該生徒の状況等	
4	6	17	17	0	17	・家庭訪問しても、当該生徒に一度も会えず。 ・母親からは、「昼夜逆転した生活が続いている」などの話を受ける。
5						
6						

成果(○)と課題(●)

- 加配により配置された教員が中心となってサポート会議を推進したことで、不登校の課題を抱える一人一人の生徒に対し、丁寧かつ適切な対応をすることができ、不登校生徒の解消・改善につなげることができた。
- 様々な立場の関係者が出席できるよう、サポート会議の定期的な開催に向け、日程調整を工夫する必要がある。

4 新たな不登校を生まない未然防止の取組

新たな不登校を生まないための魅力ある学校づくりの取組

標茶町立標茶中学校

効果的な取組とするためのポイント

生徒会が主体となり「いじめ未然防止運動」や「異学年交流」などの活動に取り組み、互いを尊重し合うことができるよりよい人間関係の構築を図るとともに、生徒一人一人の自己有用感や学校、学級への所属感を高めることができる。

取組の実際

加配教員と生徒指導部が中心となり、生徒が主体的にいじめ、不登校の未然防止に取り組めるよう指導している。

1 生徒会企画の実施

本校の体育祭は、第1学年～第3学年が異学年混合の団を構成して活動する。その準備段階として、異学年間の人間関係を構築するための生徒会企画「Let's talking」を実施した。第3学年は「責任感」、「リーダー性」を養うこと、第1、2学年は「協調性」、「社会性」を身に付けることを目的に、企画・運営は生徒会が行い、全校生徒が参加する。



【生徒会企画～「Let's talking」の様子】

2 いじめ根絶の活動

本校では「いじめ未然防止活動」の一環として、平成28年度より「標茶中学校いじめ根絶宣言」を作成している。この宣言を全校生徒が理解し、行動できるようにするため「そのメール、友の顔見て言えますか」、「言葉だけじゃ変わらない 同情だけじゃ変わらない 行動とるまで変わらない」などのキャッチフレーズを盛り込んだ生徒会通信「シェア スマイル」で発信している。



【標茶中学校いじめ根絶宣言】

3 各種検査の実施と活用

本校では、加配教員が「ほっと」の実施、分析等の中心となり生徒理解を図っている。今年度は「Q-U」も実施し、個人の傾向とともに集団の様子を分析し、不登校の未然防止に努めている。

成果(○)と課題(●)

- 今年度1回目の「ほっと」の結果において「礼儀」が56.3と他の項目よりも高かった。生徒同士のかかわりの中で、挨拶や相手に対する感謝の気持ちを育むことができた。
- 1学期末に第1学年を対象に実施している「学校生活アンケート」において、「中学校生活が楽しい」と答えている生徒の割合が平成28年度は61%であったのに対し、今年度は93%と大きく上昇している。
- 今年度1回目の「ほっと」の結果より「緊張」が第1学年・第2学年で50を下回っていることから、引き続き、学校全体で人間関係づくりに取り組んでいく必要がある。